

四重奏

短編



YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆

Duo-yamanka

四重奏

山中與隆

目次

四重奏

1

編者あとがき

112

四重奏

作 山中與隆

1

「椿たちが、来年の四月に大竹に帰つて来るらしい」
主人が、台所にいる私のところに、年賀状の一枚を
手にやっってきた。

「椿たち」

というのは椿夫妻のことで、私たちが、主人の最後の赴任地にいたときの音楽友達である。主人はそのとき住んでいた東京通勤圏のある街の市民オーケストラに入っていたが、そのオーケストラの仲間である椿夫妻にもう一人を加えた四人で弦楽四重奏も楽しんでいました。地元の公民館で四重奏のコンサートをしたりもしていたので、私はその会場で何度か椿夫

妻にお会いしたことがある。

コンサートといつても、自分たちで会場を借りて行かう入場無料の発表会で、聞きに来るのはたまたま入り口の貼り紙に釣られて迷い込んだ一般客数名の他は、私のような出演者の家族や友人などであつた。最初的时候は、自分たちが属しているオーケストラのメンバーがかなり聞きに来るかと思つたが、そんなことはなかつた。毎回、コンサートのあとで、

「やっぱり、人様に聞いてもらえるレベルじゃないね。自分たちがやって楽しむだけの、草野球みたいなものさ」

と言うのが、主人のお決まりの総括だった。それでも、そこに住んでいるあいだ毎年やっていたと思う。咽喉元過ぎれば何とやらで、総括から一週間も過ぎると、来年はこれこれの曲を並べると良いプログラムのなるぞ、などと始まるのである。わかっちゃい

るけど止められないと言うところだろうか、主人たちのような人たちに当てはまる諺はいくらでもありそうだと。

首都圏生活五年目の末に主人は定年を迎えた。私たちはそれを待っていたように年金生活を決め込んで、郷里の田舎に小さな家を建ててさっさと引っ込んだ。

そのときの住まいは会社の借り上げ社宅だったし、

都心にある会社までの殺人的な通勤、どこもかしこも人、人、人でごみごみした首都圏での生活には何の未練もなかった。しかし主人は、四重奏ができな
くなることをとてても残念がっていた。田舎に引っ込
んでしまうと、そのようなチャンスは得られないよ
うな気がしたのである。別れに際して、主人は椿夫
妻から手工の立派な譜面台をプレゼントされたのだ
った。

終の住まいは、広島県西部の山間の集落に建てた。私たちは二人とも広島出身で、この地は、今は亡き私の祖父母が住んでいたところである。

主人が最後のお勤めに精を出しているころ、私は新築する家のプランに夢中になっていた。そのためパソコンソフトを買って、来る日も来る日も間取りの工夫に明け暮れた。主人の希望は、西の方に形

よく見えている山が、部屋から眺められるようにして欲しいと言うことだけで、それ以外はすべて私の独断で計画を進めることが出来た。とは言っても、限られた予算、限られた面積の中に盛り込めることには制限が多い。メーカーの担当者がうんざりしたのではないかと思うくらい、私はあれこれ考えた。自分で言うのもなんだが、出来上がった家には満足している。小さな家だが、一部屋だけ広くして、レ

コードを聞いたり、主人が練習したりする音楽室にした。西側の窓からは主人が気に入っている山を眺められる。夕焼けの綺麗な日は格別であつた。ある冬の夕方、刻々と変化する夕焼けから目が離せないで、主人と二人で暗くなるまで立ち尽くしていたことがあつた。

音楽室の床はアップライトのピアノを置くので補強した。ピアノだけでなく、膨大なレコードのコレ

クシヨンと、やたらに増えた本が重かったもので、床の補強は、隣の仕事部屋にも施した。これは主に私がパソコンで翻訳などをするためのものである。廊下のように細長い部屋だが、これもなかなか良い部屋である。音楽室との境の壁は防音仕様にした。一方隣家は五十メートル、百メートルと離れているので、外部に対する防音にはあまり気を使う必要はなかった。私たちは、夜中でも大音響でレコードを聞

いた。もちろんCDも増え続けていたが、主人が若いときから集めたレコードの数のほうが多かった。

何といつても、空気も景色も抜群に良い。だが、都会生活から急に辺鄙な田舎暮らしになって、なんとなく都落ちした感じは否めなかった。引越す前に、早く静かなところに行きたいと思ったことは忘れて、ふんだんにある東京での文化的な楽しみが懐かしく思われるのだった。しかしそれにはすぐに慣

れた。子供のころバスに揺られてここを訪れるたびに感じていた、ひどい山奥という印象は、道路がよくなつた今はなくなっている。私たちは、車で広島市内の音楽会にも簡単に行けることを大いに利用するようになった。しかし広島音楽会事情は質量とも首都圏の足元にも及ばない。年金生活者にはそれくらいがちょうどよいと負け惜しみを言つて諦めるしかなかつた。

主人は、ここに来てからすぐ広島のアマチュアオーケストラに入って通っていたが、毎週通うにはいささか遠いのと、オーケストラのさまざまな約束ごとや回ってくる係などが、年取った主人には面倒になつたのである。二年くらいでやめてしまつた。練習から帰ってきて、あれこれオーケストラへの不満を言うのを聞いていると、私にはオーケストラの側よりは、主人の側に問題がありそうな気がするの

だった。そんなことを私が言うとは険悪になるのではしなかつたが、どうも主人の考え方に柔軟性がなくなつてきているような気がするのである。いわゆる年寄りの短気に類するものであるか。それでも音楽を、それも少しでも良い音楽をしたいと思ふ願望は強いらしく、大学時代の音楽仲間を、名簿を頼りに探し出しては家に誘つて合奏をしたりしていた。やめたアマチュアオーケストラの人たちが楽器

を持って遊びに来ることもあった。だが、たまに集まっただけではあまり面白くないのか、このころは楽器を弾くことも少なくなっていた。

「椿さんがどうして大竹なの」

大竹はここからだと言車で一時間少々、瀬戸内海沿岸のコンビナートのある街である。私は事情が飲み込めずに聞いた。

『郷里大竹に』って書いてあるだけで、詳しいことはわからん」

「広島にかかわりがあつたなんて、私たちには大いに関係があることじゃないの。聞いてなかつたの？」

「聞いたことないね。もともとあつちの方の人だと思つていたし、われわれが広島に帰るって言つてるときに、なにか言いそうなものだよな。奥さんもこの辺の人じゃないと思うし」

事情はともかくとして、かつて一緒に四重奏をしていた仲間が近くに来ることによって主人は興奮気味であった。そして、そのことはその後の私にも、我が家にも多大な影響を及ぼしたのである。

私は、中学から高校にかけて少しヴァイオリンを習い、大学では弦楽合奏のサークルに入って夢中でヴァイオリンを弾いた。そこでサークルの二年先輩

でチェロを弾く主人にめぐり合った。その年頃の二年先輩というのは、ずいぶん大人に見えたのを覚えている。もつとも大学での学年は二年上でも、いろいろな事情で主人の年令は五才も上だったのだから、そう見えて当たり前だったわけだ。

私が大学を卒業した年の五月に、私たちは結婚した。国立大学で国費を使って勉強した者が社会還元もしないで、家庭に入ってしまったのは間違っている

と言つて、私の両親は反対したが、私たちはそれを押し切つて結婚した。二浪して大学に入り、入つてからも転学部したりして六年も大学にいて、サークル活動ばかり熱心な主人、しかもその両親は離婚状態であることが、反対の本当の理由だつたようだ。

大学を卒業して会社勤めをしながらも、主人はチエロを途切れることなく続けてきた。何度か転勤があつたが、行く先々で市民オーケストラを探しては

すぐに入った。転勤が決まって、新しい住まいを探しに行つたときには、入団するオーケストラも決めてくるといった調子であつた。そしていつも、そこで気の合つた仲間を見つけては四重奏をやるのだつた。

私も結婚して子供が生まれるころまではヴァイオリンを弾いていたが、子育てで途切れてからは、た

まに楽器を出しても、すっかり下手になっている自分に嫌気がさしてさらに遠ざかってしまった。今考えると、子供の手が離れ始めたときが、ヴァイオリンを再開するチャンスだったのだが、学生時代から興味のあるフランス語に関心が向いてしまい、簡単な通訳や在宅で翻訳のアルバイトが出来るようになってからは、すっかりそちらにエネルギーを割くようになってしまった。その世界に入っていくと、その方面

の新しい仲間もできて面白さに加速がつく。ヴァイオリンのことなど思い出すこともなくなつた。

それが、今回の椿さんのことで、とんだとばつちりが回ってくることになつたのである。

椿さんのご主人は、アマチュアのヴァイオリン奏者としてはなかなかの名手である。奥さんはヴァイオリンで、いつもご主人の上手いヴァイオリンと一緒に

弾いているのだから、これもかなり上手い。一方、我が家は主人がチェロで、私がヴァイオリンだから、腕前のことを別にすれば、夫婦二組でちようど弦楽四重奏が出来ることになる。だから、私がヴァイオリンを再開したら、大変好都合だと主人が言い出したのである。

定年後の、主人と二人だけの暮らしには変化が少ない。フランス語の方は、田舎に籠ったせいもあつ

て、その関係の仲間とは離れてしまふし、アルバイトも途切れがちになっていた。私は、ヴァイオリンの再開がいかに苦難の道であるかを深く考えもしないでついその気になつてしまつたのだ。

それには別の理由もあつた。もし私が断れば、主人たちはだれかヴァイオリンの人を探してくるに決まっている。我が家で練習することになりそうだから、私だけが蚊帳の外で、お茶出し係をやらされる

のでは面白くない。それにヴァイオリンとして誘われた人が、きれいな女の人だったりしたらもつとくやしいではないか。実は、以前やっていた四重奏のもう一人というのは、とてもきれいなヴァイオリン二ストで、発表会の打ち上げなどに同席して私も知っている人だったが、その人が主人になれなれしくするの嫌だったことを思い出してしまふ。

私は、何とか捨てずにここまで持ってきたヴァイ

オリンを、納戸の奥から引つ張り出して、埃りつぽく色褪せたケースをおそるおそる開けてみた。艶やかな栗色のヴァイオリンを想像していた私は愕然とした。四本の弦はだらしなく緩み、駒は倒れていた。持ち上げると、ヴァイオリンの中でからからと何かが転がる音がする。魂柱が倒れているのだ。さらに弓の毛は、ぼろぼろに虫に食われていてかろうじて何本かで繋がっている。考えてみると二十年以上も

の間一度も開けていなかったのだから仕方がないことなのだが、この惨状を目の当たりにして、主人も私もやや盛り上がりかけた気分には水を注された。主人が楽器を持ち上げて調べると、膠でつけてある板が口をあけている箇所も見つかった。

「これ直るかしら？」

私は、少し気落ちした調子で言った。しかし、そのとき主人は違うことを考えていたのだ。

「何もかもかき集めたら、幾らくらい出来る？」

単なる修理代のことではなさそうだが、聞いてみた、

「修理代ってそんなにかかるの？」

「僕らは、このままですら、何かやりたいと思うような人生がもう十五年か二十年は続くよね。少なくとも十年は絶対にあるよ。だったら、老後生活の充実のためにこれに賭けるっていうのはどうかね」

「これに、って？」

椿夫妻の年賀状がきっかけで、彼らと四重奏を始めようと思ひ立って、こうしてヴァイオリンケースを開けることになったのだが、かき集めるとか、賭けるとか、なんだか話が飛躍している。

「椿たちも、わざわざ来年のことを言ってきたのは、一緒に音楽ができることを期待してのことだと思ふよ」

「だから私にヴァイオリンを再開しろって言うことになったのでしょ、修理のことはともかくとして、お金と何の関係があるの？」

「うん、それでヴァイオリンがこんな状態だから、この際この安物を修理することなんか考えないで、ちよつとしたのを買うことにしたらどうだろう」

たしかに安物には違いないが、これは中学時代に、妹と一緒に使うからと親にねだって苦しい家計の中

から買ってもらったヴァイオリンである。そんな言われかたでは、哀れな姿になってしまった私のヴァイオリンがかわいそうだ。

「ちよつとしたの、って？」

少し語気が険しくなってしまった。主人は私の気持ちを察したのか、少し間をおいてから続けた。

「だから、新しいヴァイオリンを買ったらどうかつて言うことだよ。まあ、どさくさにまぎれてついで

にチェロも・・・なんて言うわけにはいかないだろ
けどね・・・」

私は、すぐには返事のしようがなかった。ヴァイオリンがこんな状態になっているのも予想外であつたが、新しい楽器を買うなどと言うことは、さらに予想外の外であつた。主人のチェロは、就職してしばらくしたときに、学生時代の安い楽器からややましなの買い換えていたが、ときどきもつと良い楽器

が欲しいと言っていた。冗談めかしてはいるが、チエロを買うというのは考えられないことではない。しかし、多分音階も弾けなくなっている私のために、「ちよつとした」

楽器を買うなど、あまりにもとつぴに感じられた。しかし、主人は本気らしい。

「どうせならもつたいなくてやめられなくなつてしまふくらいのを買うといいんだよ」

「えーっ、でも、全部かき集めるって言っても……
いったいどんな楽器のことを言ってるの？」

「これまでいろいろなところで出会ったアマチュアの連中が持っていた良さそうな楽器のどれにも負けないくらいのやつ」

えらく簡単に言うものだ。スズメの涙より少ない退職金と、家を建てたために底を突いた貯金などかき集めてもたいした額にはならない。そもそもそれら

の金も、いつかは必要になる家の修理や病気に備えたもので、不要な金ではない。

「そんなもの、使つてしまふわけにいかないでしょ」私はちよつとむつととして言った。その場は、それで話がとぎれた。

しかし、同じように退職して、偶然にも近くに来るといふ音楽仲間の夫婦同士で四重奏に打ち込むと

いう構想は、私のヴァイオリン技術がどれくらいまで使い物になるかは別として、私にとっても魅力のない話ではなかった。

それから私は毎日のようにインターネットで、弦楽器店のサイトを開いて、どんな楽器が幾らくらいで出ているものなのか、夢中になって調べた。ネット上では、居ながらにしていろいろな弦楽器店の在庫状況がわかり、楽器の写真や特徴の説明だけな

く、音まで聞けるようになっていたものもある。私は北陸のある楽器店が在庫しているイタリアの一八四〇年ころのチェロに不思議な感触を持ってしまった。ネット上の情報に過ぎなかったのだが、何故か私にはピンと来るものがあつたのだ。それは、その価格は帯では信じられないくらいのクオリティで、非常によく鳴る状態に調整されていると説明があつた。写真も載っている。私はまずヴァイオリンを探さなく

てはならなかつたのだが、ついチェロを一生懸命探してしまつていた。チェロを生涯の趣味としている主人に良い楽器を弾かせたいという気持ちが、いつも心の底にあつたからだ。それだけではなく、主人の音楽する炎が年令とともに弱くなつて欲しくないという気持ちも働いていたと思う。

その店はヴァイオリンもピンからキリまでふんだんに在庫しているようだ。全財産を投げ打つて楽器

をかうなど現実のこととしては、まったく考える余地もないと頭では理解しているはずなのに、別の私がか、そうして手に入れた楽器を弾いている自分たちを想像したりしてしまふのであつた。

主人は、そんな私の心理を見透かしたように、巧妙に誘いをかけてきた。

「かうかどうかはともかくとして、北陸ドライブを楽しむことにしてはどうだろう・・・ついでにそこ

に寄つて、話の種に『良い楽器』なるものを見せてもらおう。楽器は現物を手にとって弾いてみないとね。今後のためにも良い楽器というものを拝んでおくのは悪くないと思うよ。どっちみちヴァイオリンは買うか直すかせんとならんのだし」

それならさして問題はなさそうだ。それにここに来てからまだ宿泊つきのドライブなど一度もしていない。そうと決まると私たちは早速、その楽器店に

連絡をしてアポイントをとった。あくまでも旅行を
楽しむのが目的で、そのなかのワンポイントとして
楽器を見学するコースがあるだけ、と自分に言い聞
かせて、出かけることにした。楽器店にも、楽器を
見せてもらうために行くのであつて、買うつもりは
ないのだと何度も念を押した。それでもなぜか車の
トランクにはチェロと私の壊れたヴァイオリンを積
み込んだ。

私たちは途中、大阪と名古屋にも寄り道して弦楽器店を訪ね、いかにも数百万の楽器を探しているような顔をして高級そうな楽器を見せてもらった。主人は試奏もさせてもらったのだった。欲しくなるような楽器もあつたが、それらは七百万とか八百万とかするものだったから、買いたいという現実的な衝動は起きなかつた。

名古屋から国道一五七号線で北上し、金沢近くの

ビジネスホテルに一泊して、お目当ての楽器店には
開店間もない時間に到着した。

店と言っても、普通の住宅街の中にあつて、ヴァ
イオリンの形をした看板がなかったら、まったくそ
れとわからないようなところだった。

ニコニコしながら迎えてくれたご主人は、五十が
らみの痩身で、茶髪、チョビ髭で何となく弦楽器屋
さんというイメージに合わない風貌だ。私はインタ

ーネットの写真で知っていたので、それほどおどろかなかつたが、主人は気に入らなかつたようだ。大阪でも名古屋でも、応対してくれた楽器店のご主人たちは、いかにもインテリ風の紳士たちで、落ち着いていた調子で楽器の良し悪しなどを話されると、非常に信頼できるように見えるのだった。その後だっただけに、楽器でいっぱいの部屋に通されて、二人だけになつたとき主人は

「あの人、大丈夫なの？」

と私に囁いた。私は、自分が見つけた店ということもあるのです、平静を装って、

「見かけは問題じゃないでしょ」

と強がって見せたが、実は私も、ご主人がその姿だけでなく、猛烈な勢いで話し続ける人で、こちらが口を挟む間がまったくないほどであることにびっくりしていたのであった。

私はあらためて来意を告げ、例のチェロを出してもらった。前もって連絡してあったので、すぐに弾けるように調整してあった。他にも二、三台用意してくれていた。主人はそのチェロをひと目見て、「うっ」

と唸ったきり、楽器の表から裏、横と見回すばかりで弾こうとしない。私も啞然としてしまった。私が靈感を受けてピンと来たその楽器は、まさに満身創

痕、どこもかしこも傷だらけだったのだ。いや、傷ではなく割れだらけなのである。その割れが修理されているのである。ネットの写真では気づかなかつたことである。

「これが電話で、私が見たいと言った楽器ですか？写真ではこんな割れは見えませんでしたし、そのことについて何も書いてなかったですよ」

私は、主人を騙してしまったような気持ちで必

死で楽器店のご主人に聞いた。

「そうですね。でもぜんぜん大丈夫です。割れは完全に修理されていますから。とにかく弾いてみてください
ださい」

と自信ありげに言つて、主人を促した。主人は、自分の弓をケースから出して、毛を適当に張ると、ま
ず軽く弦に触れるように弾いた。張りがあつてしか
も甘い音色が部屋に響き、楽器の中でいつまでも残

響している。主人はさらに強い音、高い音、低い音、速い音、ゆったりと長い音を弾いた。弾きなれた曲のメロディも次々と弾いた。すっかり気に入ってしまったような主人は、他の楽器は見向きもしなかった。持ってきた自分の楽器と比べることさえしなかった。側で聞いている私も、その必要を感じなかった。主人の楽器とはあまりにも大きな違いなのである。ご主人はいつのまにか隣の作業室のほうに姿を

消していた。心行くまでお弾きなさいということだろう。何よりも私の不思議な勘が間違いでなかったことが嬉しかった。

ひとしきり弾いてから主人が、いま必要なのはチエロではなくヴァイオリンだからと言つて、ご主人にヴァイオリンを見せてくれるように頼んだ。私はついにそのときが来たと思つた。店の人の前で試奏しなくてはならない。しかも主人は、自分が気に入

ったそのチエロに見合うくらいのもを見せてほしいなどと言っている。主人ははったりをかけるような性格ではないと思っていたが、大阪でも名古屋でも、いままたここでも結構堂々と金のある客のような振りをしている。仕事で鍛えられて身につけたものなのだろうか、私の知らなかつた一面である。

私は、いろいろな意味で身の縮む思いであつた。幸いに店の若い女性がヴァイオリンを上手に弾くこ

とがわかったので、出してくれた楽器を次々に弾いてももらった。聞いたりしやべったりしているうちに私も気がほぐれて、ヴァイオリンを手にして弦をはじいたり弓で音を出してみたりした。何十年ぶりだろうか。店の女性が朗々とした音を出した後なので、私の出す音はひどく貧相だった。しかし、昔弾いていたころの自分が体の奥の方から呼び出されるような快さを感じ始めた。

結局私は、それから約三時間のあいだ、あれこれ出してくれた楽器や弓をとつかえひつかえ弾き比べ続けた。とは言つても、私はまともには弾けず、楽器店の人たちにその音を聞かれるのがとても恥ずかしかつた。それでも、ご主人が私に初心者用の楽器を勧めたりしなかつたことを、ありがたいと思つてゐる。

途中昼食のために二人で街に出た。クールダウン

も必要だったのだ。『うまいトンカツ』の大きな看板につられて入った店でトンカツ定食をゆっくり食べながら、あれこれ堂々めぐりの議論が続いた。しかし結局、

「これ以上かかわり続けると、買うはめになってしまふから、食べ終わったら挨拶だけして帰ろう」という結論を出した。ヴァイオリンは、今日の感触を参考にして、もう少し時間をかけて値段の手軽な

ものを探すことにした。これは我が家にとっては非常に正しい結論であつた。

主人に良いチェロを弾かせたいという思いの点でも、そして実は私自身にとつてもその結論にがっかりしなかつたかと言うと嘘になる。まともにヴァイオリンの音を出したとは言えない私は、口に出して言うのは気が引けるのだが、とても気に入つたヴァイオリンが一つあつたのだ。美しい栗色をしていて、

密度の高い充実した力強い音色がとてもよく響く一八六〇年ころのフランス製の楽器だ。もちろん店の女性が弾いてくれてそう感じたのだが、自分が触つても何となくそれがわかるような気がしたのである。主人が一目惚れしているらしいチェロとのマッチングも良さそうだ。主人も同じような感想を持ったと言ふ。

ではあるが、買わないことに決めて店に戻った。

ところが、ご主人の顔を見た途端に

「トンカツ屋の誓い」

はどこへやら、もう一度だけ触らせてくださいなどと言つて上がり込み、さらに数時間粘つてしまった。

そして、夕方暗くなつて楽器店を出発する私たちの車には、来たときとは違つてヴァイオリンとチェロが積み込まれたのだった。持つていった楽器はどちらも、必要な修理をして調整しなおしたら十分に使

えると言つて、予想以上の値で下取りしてくれた。私は、ヴァイオリンだけでなく弓まで買つてしまつたのであつた。弓だけでも、それまでの私の常識では想像も付かない値段だつた。

車を走らせながら、私たちは後悔とも嬉しさともつかない複雑な気持ちに襲われていた。大きなことを思い切つて決断したという満足感も混じつていたが、今から楽器をキャンセルしに引き返そうと車を

道の脇に止めたことさえあつた。でも結局は広島まで帰つてきてしまった。

かくして私たちはスツテンテンになつたが、引き換えに我が家の経済にも、演奏技術にもぜんぜん見合わない楽器が手元に残つた。これまですつと弾き続けてきた主人は、すばらしい楽器を満足げに弾いた。でも気のせいか必死で後悔の念を振り払おうと

して弾いているようにも見えるのだった。

それより悲惨なのは私だった。私の場合は経済の問題だけではないのだ。音の出し方も忘れかけている私にとっては、楽器が何百万であろうと何の意味も持たない。

次の週からヴァイオリンのレッスンを受けることになった。私は、楽器の持ち方から指導を受けた。

フランス語のときも、家の設計のときもそうだつ

たが、私は一旦何かを始めて夢中になりだすと、憑かれたようになってしまふ癖がある。朝から晩までヴァイオリンを弾いた。哀れな音しか出してもらえない私の美しいヴァイオリンは、さぞかしプライドを傷つけられたことであろう。

主人の方も、格段にグレードアップした楽器に引っ張られるように、練習に熱が入り、プロオーケストラのチェリストのレッスンを受け始めた。満身創

瘻の主人の新しいチェロについては先生の評価も高く、主人は喜んでいたが、それは私にとってこそ大きな喜びであつた。そのレッスンはとてもよかつたようで、主人は年齢にもかかわらず僅かずつ腕を上げた。少なくとも主人の方は、新しい楽器を買つてよかつたと言つていいようだ。

少し楽器に慣れたころから私たちは、主人が長年

の間に買い集めた四重奏曲の楽譜を出しては、チェロと第二ヴァイオリンのパートを合わせた。レッスンと猛練習のおかげで多少勘は戻ってきたが、曲を弾くとなると簡単ではない。モーツァルト初期の四重奏曲のさして複雑でない譜面も、なかなか弾けない。あとひと月もすると、椿さんたちが戻ってくるというころになっても、ごく簡単な四重奏曲がやつと弾ける程度から抜け出せないでいた。主人は、自

分は何十年も弾き続けてきたのに、私がその主人を
あつという間に追いついたなどと煽てるが、現実には
そんなに甘くないことはよくわかっている。私は、
いらいらしながらもヴァイオリンを弾きつづけた。

二人で合わせていて、本当に時々だが、ヴァイオ
リンとチェロの音が快く響きあうことがわかってき
た。主人は、

「やっぱり、二人がバランスの取れたレベルの楽器

にして良かった』
と言ったが、そうかも知れないと思う。それにしても、もつと随所でそう思えるようになりたいものである。

椿さん夫妻が、楽器を持って我が家に現れたのは、例の年賀状から一年半たった六月になってからだつた。三月の終わりには引越して来ていたのだが、

片付けやなにやかやですぐには暇ができなかつたのだそうだ。

音楽室に入るとすぐに、椿さんのご主人は部屋の真ん中に立ててあつた譜面台を見つけて、

「これが、あの譜面台ですね」

と感慨深げに眺め回した。製作者に注文してそのままここに送ってもらつたので、現物を見るのは初めてだつたのだ。

二組の夫婦は、再会の挨拶もそこそこに楽器を出しはじめた。主人が、

「まずは挨拶代わりにモーツァルトの初期でもやりましようか」

と言って、バラバラになりそうな年期の入った楽譜を配った。私が何とか弾ける数少ない曲のひとつである。

いつも二人だけで合わせていたこの部屋に、四つ

の楽器がそろい充実した響きが鳴った。その瞬間私は、弾きながら目頭が熱くなるような感動を覚えた。もちろん私は上手く弾けたわけではなかったが、四人が出す音の響き合いに感動したのだ。椿さんたちも楽しそうである。

結局その日は、モーツァルトの初期の四重奏曲を三曲、ひととおりに通して弾いただけで、あとは食事をしながらもつぱらおしゃべりで時間を過ごすこと

になった。話題はお互いの別れてからのことに花が咲いて、これからの四重奏についての話は出ないままであつた。椿夫妻がなぜ大竹に来たのかというところ、椿さん自身は親の時代からはずっと東京方面だつたのだが、大竹には昔、椿さんのおじいさんが住んでいたのだそうだ。老後はどこか田舎に住みたいと思つていたところ、おじいさんの土地があることがわかつて、そこに家を建てて越してきたと言うことで

あつた。私たちが広島に帰ることになつたときには、椿さんたちはまだ田舎暮らしのことなどまったく考えていなかつたので、おじいさんの土地のこととも思ひ出さなかつたようだ。

都会を捨てて地方でゆつくり老後を過ごそうと考えるようになったのは、私たちと同じである。それにしても、私たちの家とこれほど近いとは、具体的に私たちと連絡を取り始めるまでわからなかつたそ

うだ。家の建築中に何度か大竹に来ているのだから、わかっていれば寄るのだったのにと残念がっていた。夜遅くまで話し込んで椿さんたちは帰っていった。

椿さんたちが、四重奏のことをあまり話さなかったことが気になった。私は、自分があまり下手だったので、椿さんたちはこのメンバーで四重奏をすることにあまり興味がわかかなかったのではないかと思

った。主人にそのことを言うと、

「そんなことはないよ」

と言うだけで、主人もこの日の会合には何となく物足りなさを感じているようにみえる。

「われわれの腕のせいじゃなくて、ただ久しぶりだから、音楽が溶け合わなかったのだと思うよ。きつと何回か合わせるとうまくいくようになるよ」

と慰めてくれた。それにしても、椿さんからの年賀

状にすっかり興奮してしまつて、すぐに家中の金をかき集めて楽器を買い、自分たちのこれからの人生を賭けようと燃え上つた一年半前と、その後の猛練習の日々からすると、何となく拍子抜けしたビッグデイであつた。

その夜、椿さんの奥さんからメールが入つた。

『今日は楽しい時間をありがとうございました。私たちは久しぶりの四重奏、というより楽器を持つの

も久しぶりだったので、上手く弾けませんでした。演奏もおしゃべりも食事もとても楽しかったです。

帰りに主人と話したのですが、これからぜひ定期的に練習会をして、じっくり良い音楽作りに取り組みたいと思うので、どうぞよろしくお願いいたします。

とりあえず曲を決めて、月一回くらいのペースで練習してはどうかと言うのが私たちの意見ですが、そちらのお考えも聞かせてください。それから、私

どもの家は隣と接するように建っているので、合奏のときはお差し支えなかつたらお宅の素敵な音楽室で練習させていただければ幸いなのですがよろしいでしょうか。

とにかく私たちは今日大満足でした。主人が言うには、お二人の演奏はとてもいい感じでした。特にヴァイオリンを再開されたばかりという奥さんが、とてもしつかり弾いておられたので感心したそうで

す。私も同感です。

ではよいご返事をお待ちしています。……椿』
余計な心配は要らなかつたようだ。しかし、

「お二人の演奏は……」

とあるのは、明らかにお世辞で、主人はともかくとして、私の演奏に感心するなどありえない。これからが大変だという思いがひしひしと重みとなつてのしかかるのだつた。これまでだつて、精一杯練習し

てきたのに、

「じつくり良い音楽作りに」

などと言われてもこれ以上のことが自分に出来るだろうか。四重奏としては良いスタートであつても、自分が参加している限り、そのうち愛想をつかされるのではないかという心配が大きい。主人のチェロにしても、私よりはましでも、椿夫妻の実力に比べるとまだまだである。

楽しみと不安が相半ばした状態で、二回目の練習会が近づいた。まずはハイドンの作品二十のへ短調四重奏曲に取りくむことになった。最近私たちがテレビで聞いて感動した曲で、主人の提案で決まったのである。だいたい主人は、弾けるかどうかということを見無視して、弾きたいかどうかで曲を決める癖がある。フラットが四つもついた調性というのが私

には負担だ。

とにかく私たちは次の練習会に備えて、その曲を懸命にさらった。私は第二ヴァイオリンを受け持つことになっていた。弦楽四重奏では、ヴァイオリンのパートは第一と第二に分かれている。第一ヴァイオリンは、四重奏の中で最も高い声部を受け持ち、ほとんど主要なメロディはこのパートが弾くことになる。第二ヴァイオリンは、ヴィオラ、チェロとと

もに和音を作ったり伴奏を受け持ったりすることが多い。もちろんどのパートも大切なのだが、なんといつても第一ヴァイオリンがしつかりしていないと格好がつかない。したがってアマチュアが四重奏をするときは、二人のヴァイオリンのより経験の豊かな方が、平たく言うとうまい方が第一ヴァイオリンの座につくのが普通である。私たちの場合椿さんのご主人が第一というのは議論の余地のないところで

あつた。第二ヴァイオリンのパートは、第一ヴァイオリンに比べると、音域は低いところが多いし、速いパッセージも比較的少ない。それでも私には、練習しても弾けるようにならないところが何箇所もある。

ヴァイオリンを習いはじめたばかりの子供は、その段階で出来ることだけを使つて弾けるような簡単な曲を与えられる。家に帰ったら急にハイドンの四

重奏曲を弾かされると言うようなことはない。ところが私はそれをやっているようなもので、初めから無理を承知で進もうとしているのである。まあ私ほどではないにしても、アマチュアの大人は大なり小なりそういうやり方になっている場合が多いと思う。だから要求される水準が高いと、プレッシャーが大きくなるのである。このハイドンはすごく良い曲なので上手く弾きたいのだがどうしようもない。

二回目の練習日、前回とは打って変わって、椿さんのご主人の態度が厳しい。初めのうちは奥さんのヴィオラに注文をつけていたが、それはあくまでも私たちへの遠慮のためで、やがて、主人のチェロに注文が飛び始めた。私には何も言わない。こうなるのと、私には言っても仕方ないと諦められているようでかえって嬉しくない。かといって、何か言われた

としてもその場で直す自信も能力もない。私にとつては、合奏を楽しむ余裕などまったくない緊張した状態で練習が進んだ。根を詰めた練習が二時間ほど続いたあと、休憩になった。

私を入れたコーヒーストをすすり、椿婦人が焼いてきたクッキーをつまみながら、今の練習について話し合った。と言つても話し合っているのは男二人で、女二人はもっぱら口を動かしながら聞く役であつた。

ただ、その中で椿さんのご主人が、

「このハイドンの曲は音程をとるのが難しいですよ。でも奥さんが一番しつかりした音程で弾いておられましたね。フーガなんか素晴らしかったですよ」と言うのだった。もちろん褒めすぎで、百パーセントお世辞であることはわかっているが、嫌な気はしない。もしかしてその一パーセントだけでも本当のことがあるとしたら、喜ばしいことだ。実際にフー

ガの出だしはちよつと自信があつたのだ。でもそれ以外は問題だらけだったはずだから、どうみても自信をなくさないように気を使つてくれたのだ。

「たしかに良かったよ。ずいぶん音程をチェツクしながら練習してたからね。効果があつたと言うことだよ」

と、主人までが煽てる。

休憩後、さらに三時間近く練習して、夕方暗くな

つてから椿さんたちは帰っていった。

私は、その夜練習を流して録音しておいたものを聞きなおした。一緒に弾いているときは、自分以外の三人はさらさらと上手く弾いているのに、自分だけが四苦八苦しているように感じていたが、録音を聞くと私以外の三人も結構あれ上手くいっていないところがある。音程に限って言うと、椿さんのご主人は大体問題なく弾いているが、あとの三人は

随所ではずれているし、一見よさそうに聞こえるところも、なかなかぴたりとはまっていけない。ひいき目だが、意外に私がましな部分も少しはある。だからといって、喜んではいけなのだが、少し気分が楽になった。すると現金なもので、早くも次回が楽しみに思えてくるのだった。そればかりか、いつか第一ヴァイオリンも弾いてみたいものだとさえ思ったりするのだった。

その後まじめな練習会が続いた。とにかく私たちはみんなまじめだ。演奏時間が五分そここのひとつの楽章を練習するのに三、四時間があつたという間に過ぎていく。それでも、みんなの音がぴたりと合って、ハイドン独特のビーンと身が引き締まるようなハーモニーが響く瞬間はなかなかやつてこない。練習が進んで、音楽的なニュアンスを問題にし始め

ると、これがまた大変なのだ。そういうことは言われてすぐに出来るようなことではなく、それぞれが持っている音楽的なセンスの問題も絡んでくる。あ
いかかわらず椿さんのご主人は、ヴィオラとチェロに
は、それではだめで、こう弾いたほうがいいなどと、
ほとんど一小節ごとに言っている。言われる方は二
人ともだんだん不機嫌そうな顔つきになっていくよ
うに見える。それでも椿さんは遠慮なく注文し続け

る。これも根気の要ることである。ところが、私には、もつと大きく弾いてとか、そこは小さくなどと単純なことしか言わない。明らかに、出来る者に言うことと、出来ない者に言うことを区別している。間違つてはいないと思うが、私としては愉快ではない。みな表情が険悪になつてきている。一進一退の状態が続いた。練習が進展したかに見えても、前に何度も繰り返して良くなつたと喜び合つたところ

が、もう一度弾くときには元のよくない弾き方に戻っていたりもする。なんだか天井にぶつかつたような閉塞感がみんなの中に広がり始めた。

主人の提案で、練習中の曲を少し棚上げして、次回は別の曲を練習しようということになった。せつかく今の曲に慣れてきたのに、また初めからやらなければならぬと思つたが、私は何も言い出せず主人の言うとおりになつた。次回練習する曲は、気分

轉換効果があるようにと、ドヴォルジャークの『アメリカ』になった。

また一から練習の、苦難のひと月が始まった。しかし始めてみると、よく聞き馴染んだ曲のせいか、これまでの曲よりもかなり練習がはかどった。少しは私の演奏技術も進歩したのかもしれない。

『アメリカ』の練習会は、比較的楽しみながら出来た。考えてみると、私にとって、『アメリカ』の音符

がハイドンよりみやすいというわけではなかったのだから、これはちよつと不思議なことだった。

『アメリカ』中心の練習会は二回あった。ただ、弦楽四重奏曲のなかでは抜けてポピュラーで、私もとても好きな曲なのだが、あれこれ言いながら繰り返し練習していると、ハイドンの曲に比べるとなんだかこの曲は、こういう練習に向かないような気がしてきた。

この問題について主人と話したことがある。主人が言うには、

『アメリカ』は、そこに盛り込まれている音楽的な感情が、誰にとつてもわかりやすいから、どのよう
に弾いたらいいかが明白なのだ。それに比べると、
ハイドンの曲の方は、われわれからみるとその感情
が抽象的で明確には捕らえにくい」
そして、

「すぐれた演奏で聞くと、われわれはどちらの曲からも感銘を受けるが、その感銘の中身は違う。自分でも想像できる内容に対する感銘と、どうなっているのかよくわからないが、何故かすごく感じが良いといった違いなのだ」

私も口を挟む、

「良いと思う演奏を、なぞるように真似すれば私たちにも良い演奏が出来るってことね」

「それはそうだけど、たとえばフランス語を何一つ知らない者が、フランス語の本を丸写しするようなもので、トンチンカンな間違いがあつても気が付かないし、本がないと自分では一言も書けないよね。もつとも、真似の上手い人だったら、フランス語を知らない人が書いたとは気づかれない場合もあるかも知れないね。それと同じじゃないかね。ロマン派の音楽と、ハイドン、モーツァルトの音楽との大きい

な違いだと思ふよ。どちらが優れているかという問題じゃないんだ。ベートーヴェンはちようどその中間に位置しているんだ」

主人お得意の分野に入り込んでしまった。こうなる
と、私が聞きたいことを越えて解説が続く。

さて、私たちは『アメリカ』の練習会を二回やつた後、ハイドンに戻ることになつた。三ヶ月ぶりに

ハイドンのへ短調を弾いた。冒頭、三つの楽器が弾く鼓動のような伴奏にのって、第一ヴァイオリンの熱っぽい短調のメロディが鳴り始めたとき、私は背筋にぞくぞくするものを感じた。そこに表さされている感情が抽象的でわかりにくいとは、どうも私には思えない。それは、初めての日の感動とは違って、自分たちが作り出した音楽への感動と言えるものだと思つた。

でも、曲全体を眺めると、抽象的でわかりにくい部分もかなりあるかなと思つたが、そのことで主人と議論するのはやめた。少し自分で考えてみよう。

このようにして私たちは、特に本番を想定することもない練習会を繰り返しながら楽しく充実した時間をも共有したのだつた。

発表会について話が出なかつたわけではない。アマチュアの音楽家たちは、練習したものを誰かに聞

かせたくなると言う共通のはた迷惑な性癖を持つて
いる。聞きに来てくれた友人などに、

「素晴らしかった。感動しました」

などと言われると、つい嬉しくなってしまうのだ。

私は、

「私がもう少し上手くなるまで待つて」

と言うと、

「そんなこと言っていたら、上手くなる前に老いぼれ

てしまうよ」

と主人。

「私も、もう少し、たとえばもう一年くらいこつこつと自分たちの練習を積み重ねてからのほうが良いと思うわ」

と、椿さんの奥さん。

「まあ、あんまり堅苦しく考えなくてもいいんじゃないかね。どうせ練習課題は永遠なんだし」

とは、ご主人。どうも、男性陣は、発表会での演奏の質よりも、人前で弾くことそのものに興味があるようにみえる。

私たちがいかに真剣に練習をつんだとしても、演奏会で聴衆に音楽の感動を与えるような演奏はなかなかできない。しかし聴衆はいなくても、こうして四人で練習するのは十分に感動的ではないか。もし、一流の四重奏団の演奏会を聞きに行くのと、四人で

練習するのとどちらかを選べと言われたら、私だつたら練習のほうを取る。主人はいつもこれを草野球とよく似ていると言っている。下手ながら懸命にボールを追う草野球のプレーヤーたちの喜びは、プロの高度なプレーを見たときに得られる痛快さに勝るとも劣らないものだ。

「それごらんなさい」と言うのと、

「草野球を見るのも結構面白いものだよ」
などと言う。頭で考えたことと、気分が求めること
にはずれがあると言うことか。

一年して振り返ってみると、四人で練習した曲は
四曲になり、私たち夫婦の楽器は、持ち主の力不足
に抵抗するのを諦めたのか、たまには
「おっ」

と思うような良い音を出してくれることがある。もつともそれは自分が密かに思うことで、椿さんたちからは、主人も私もまだ一度も楽器を褒められたことではない。

「誰のにも負けないくらいのもの」
と言った主人の言葉に当てはめたとき、椿さんたちのものが私たちに比べてどうかとなるとわからない。もちろん椿さんたちの楽器も決して悪くないは

ずだ。楽器の鳴らし方も音楽のうたい方も上手い椿さんのご主人の音は、私たちよりもはるかに音楽的で、素晴らしく聞こえる。いつの日か、私もあるフレーズを見事にうたって、「なかなか良い楽器ですね」などと言わせたいものだ。

この活動も、決して楽しいばかりではない。いく

ら練習しても自分が上達しているのかどうかわからない。レッスンでは毎回同じような注意を受けるし、四重奏の練習では思うように弾けないところばかりだ。練習会は、基本的には充実していて面白いのだが、名演奏で聞くような素晴らしい表現などまったく出来ない。練習のとき、出来ないことを繰り返して要求されるのも、辛いものがある。疲れたときなど、こんなことはやめて旅行でも楽しんだほうがよっぽ

ど楽でいいのにと思ったりすることもある。楽器にお金を使ってしまった今は、それも出来ない。楽器にしても、

「トンカツ屋の誓い」

に従っておけばよかったのかなと思ったりすることもある。

でも、すでに選んだ道を歩いているのだ。行けるところまで行くしかない。何十年も弾き続けている

主人も、よくよく思い出してみると、チェロに対する意欲の強さには波があつたような気がする。私も、最初の谷間に差し掛かっているのかも知れない。主人は、

「そういうときは、バタバタしないで、何も考えずに淡々と普段の練習をすることだ」と言う。みんなは本当に楽しいのだろうか。私なんかではなく、もつと上手いヴァイオリンとだつたら、

もつと楽しいのではないのだろうか。つい、余計なことまで考えてしまう。ぐずぐずしていると次の練習会の日がきてしまう。主人が言うように、淡々と練習することにしよう。

(完)

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

四重奏

2022年9月20日初版発行

著者:山中與隆

編集:山中伶子

表紙素材元:

www.photo-ac.com

タイトル:緑あふれる初夏の風景

作者:むすす!さん

写真のID:24413523

www.illust-ac.com

タイトル:弦楽四重奏

アンサンブル 女性

作者:おすそわけさん

イラストのID: 22999525

©Tomotaka Yamanaka 2022
<https://www.duoyamanka.com>
